

大切な人を失ってからもうすぐ2年が経つ。
オランダ人だったその人とはオランダの運河を航くり
パークルーズ船の上で出会った。

ヨーロッパの中では小国にすぎないオランダだが、長崎に
いると、オランダ坂やハウステンボスなど、その存在は“身近”
だ。オランダ伝来のもの、日本語化したオランダ語などが日常
にあふれていて、日本との歴史を知らない今どきのオランダ人
はかなりびっくりする。

私の仕事は、さまざまな国の人と仕事をする機会が多い。仕
事相手はアメリカの会社が大半なのに、仲良くなるのはなぜか
オランダ人なのだ。ヨットという文化がある上、団体行動が苦
手なオランダ人は客船業界にそれほどいないのだが、同業の編
集者、写真家、ジャーナリスト、運河をめぐる船関係者などと
出会う。細かく言うと、オランダ語（フランドル語）を話す隣
国ベルギーの一部のエリアの人ともかなり気が合う。オランダ
人とベルギー人同士はあまり仲がよくないが……。

日本と交易を始めた大航海時代から、オランダ人は自由な精
神を持っていた。荒れ狂う海の上で信じるのは自分、そして自
分たちの技術と経験。キリスト教の中でも比較的ゆるやかなプ
ロテスタントの国でありながら、宗教さえも人々の精神を縛る
ことは少なかった。

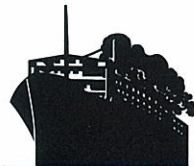
それは現在も脈々と受け継がれているようで、オランダ人は
こちらが驚くほど、自由で自立している。大麻が吸える「コー
ヒーショップ」や飾り窓に代表される“売春”が合法なのは、
オランダを語る時によく話題に上る。

しかしこれらを利用しているオランダ人に私は出会ったことは
ない。利用客の多くはイギリスやドイツなど車やフェリーですぐ
来られる近隣国や日本人も含む観光客がほとんどなのだ。オラン
ダ人曰く「軽い大麻を続ければ、覚せい剤などのもっと重い、違
法の麻薬が欲しくなるし、そんな麻薬に縛られる人生なんて自
由ではない。売春だって、興味がある女性がいれば、直接誘え
ばいいだけだから、お金を払って飾り窓に行くなんてしない」。

オランダとの

因果 | 私の中的長崎／その③回 文、藤原 暢子

*text by Fujiwara Nobuko



長崎で18歳まで過ごし、少なからずオランダに対する知識
があったはずなのに、本物のオランダに行けば行くほど、
チューリップや木靴じゃないオランダが見えるようになってき
た（実際にちょっと田舎へ行くと、おじいさんたちは木靴を履
いて、自転車に乗っていたりもするのだが……）。

自由で寛容、個人を大切に。私の友人は共同経営者と同
じ名刺を使っていた。片面には彼の名前、もう片面にはパート
ナーの名前が書いてある。理由は「名前とか肩書きなんてどう
でもいいんだ。自分のことを知って理解してくれれば、仕事に
なるよ。2人で1枚の名刺のほうが安いしさ」とのこと。

画家のヴィンセント・ヴァン・ゴッホの名前も「ゴッホ村の
ヴィンセント」という、ほとんど思い入れのない名前、いか
にオランダ人が表面的なものに興味がないかが分かる。

そんな自由さに共感するのか、気がつくともオランダに魅了さ
れ、仕事の合間に友人たちを訪ねるようになった。今はインタ
ーネットでお互いの顔を見ながら、メッセージを打ち合う「チャ
ット」という便利なものもある。17世紀、帆船で約1年を
かけ長崎にたどり着いていた時代と比べるとなんとという差だろう。

ただ、2年前のある日、私の友人は命を絶った。安楽死が認

められ、自殺も責められない国。死ぬ自由も責任も自分が持つ
ている。

「国に帰るけれど、大航海中何が起きるかわからない。もう一
生会えないかもしれない」。そんな会話を交わし、深い悲し
みをこらえながら、港から船を見送った、当時の長崎の人々の思
いを初めて経験した。私の場合は確実に“一生会えない別れ”
であったけれど。“生まれ変わり”などは信じないが、もう会
えないオランダ人を見送る運命にあったのは、今も仕事で長崎
の港に立つ、私が背負った、何かの“因果”なのかもしれない。

私にとって、その友人はヨーロッパの入り口だった。取っ
つきにくいヨーロッパの国々も一緒に行ってもらえば、偏見なく
自由に入り込んでいくのでどの国も過ごしやすかった。

彼を失ってからはヨーロッパへ行く機会を減らした。しかし、
再び私をヨーロッパに誘ってくれるのは、やはりオランダの友
人たち。「日本は地震があったようだけど、大丈夫？オランダ
において、地震はないよ」「次に来るのはいつ？うちの猫が待
ってるよ」。ありがたいことに、そんなメールが毎週、私のメ
ールボックスに届いている。